

# 「系一個」存在論

宮下英明 著

Ver. 2015-04-16

# 「系一個」存在論

## 本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている『「系一個」存在論』を PDF 文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

# 目次

はじめに	1
1. 「系一個」存在論	3
1.0 要旨	4
1.1 存在は, 「系一個」	5
1.1.0 要旨	6
1.1.1 存在は, 「系一個」構造	7
1.1.2 個の自由性: 多様, そして独自に運動	8
1.1.3 系は, 衝突する個の自由の逐次均衡相	9
1.1.4 系は個の延長ではない(「ミクロ・マクロ問題」)	10
1.2 存在は, 非実体	12
1.2.0 要旨	13
1.2.1 存在は, 「系一個」連鎖	14
1.2.2 「系一個」連鎖の上限・下限	15
1.2.3 存在は, 非実体	16
1.2.4 存在論と「自然」	17
2. 「系一個」存在論に類縁の存在論	21
2.0 要旨	22
2.1 「個・系」の存在論	23
2.1.0 要旨	24
2.1.1 「コナトウス」(スピノザ)	25
2.1.2 「オートポイエーシス」	27
2.1.3 「リゾーム」(ドゥルーズ=ガタリ)	30
2.1.4 「複雑系」(複雑系科学)	34
2.1.5 「無用の用」	35
2.2 「非実体」の存在論論	36
2.2.0 要旨	37
2.2.1 「空(くう)」	38

2.2.2 「粒は波」(量子論)	40
3. 言語レベル	43
3.0 要旨	44
3.1 存在の記述は, 「マクロ・ミクロ」二重性	45
3.2 ミクロの記述は, マクロにつながらない	47
3.3 実体論/表象主義の受容	48
おわりに	53
参考文献	55

## はじめに

わたしは、若いときから、存在論は「色即是空、空即是色」がいちばんよいと思ってきた。

実際、物理学が示す「存在の階層構造」と、これは合致する。

本論考は、この存在論を「系一個」存在論」の名前でまとめようとするものである。

併せて、「コナトゥス」(スピノザ)、「オートポイエーシス」,「複雑系」(複雑系科学)を、「系一個」存在論」に類縁の存在論として挙げる。

これは、「系一個」存在論」のパラフレーズの意味合いがある。

## 1. 「系一個」存在論

### 1.0 要旨

### 1.1 存在は, 「系一個」構造

### 1.2 存在は, 非実体

## 1.0 要旨

存在は「系一個」の構造をとる。

これには、つぎの含蓄がある：

系は、衝突する個の自由の逐次均衡相

系は個の延長ではない

存在は、「系一個」連鎖

存在は、非実体

「系一個」存在論は、これに類縁の存在論がある。

最も古いものでは、仏教の存在論である「空(くう)」が挙げられる。

今日のものでは、「オートポイエーシス」、そして複雑系科学の謂う「複雑系」を挙げることになる。

系に対して個は「ミクロ」であり、個に対して系はマクロである。存在が「系一個」の構造をとるとは、存在が「マクロ・ミクロ」二重性だということである。

存在の「マクロ・ミクロ」二重性に対応して、存在の記述は「マクロ・ミクロ」二重性になる。このとき、マクロ記述とミクロ記述は、言語レベルの違いが立てられる。

ミクロ記述は、意図的に実体論を行う。

マクロ記述は、現象論——形(かたち)論——を行う。

## 1.1 存在は、「系一個」構造

### 1.1.0 要旨

#### 1.1.1 存在は、「系一個」構造

#### 1.1.2 個の自由性：

多様、そして独自に運動

#### 1.1.3 系は、衝突する個の自由の 逐次均衡相

#### 1.1.4 系は個の延長ではない (「ミクロ・マクロ問題」)

### 1.1.0 要旨

雲は、水の粒が〈個〉になってつくる系である。

水の粒は、水の分子が〈個〉になってつくる系である。

一般に、人の立てる「存在」は、「系一個」構造になる。

本論考はこれを命題として立てる：

#### 存在は、「系一個」構造

雲は、〈個〉である水の粒の関係性である。

水の粒は、〈個〉である水の分子の関係性である。

個の関係性である系は、個の延長ではない。

数学の言い回しを用いれば、個と系の関係は「非線形」である。

これは、「ミクロ・マクロ問題」<sup>(註)</sup>と呼ばれる主題の内容になる。

系に対して個は「ミクロ」であり、個に対して系はマクロである。

存在が「系一個」構造であるとは、存在が「マクロ・ミクロ」二重性だということである。

そして、系は個の延長でないとは、マクロはミクロの延長ではないということである。

註：「ミクロ・マクロ問題」とは、「ミクロとマクロのつながりをどう考えればよいか？」の問題である。

この問題は、各種分野で立つ。

### 1.1.1 存在は、「系一個」構造

雲は、水の粒が〈個〉になってつくる系である。

水の粒は、水の分子が〈個〉になってつくる系である。

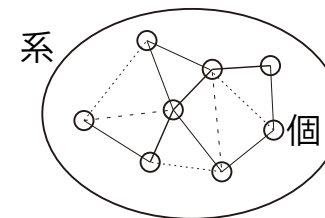
水の分子は、水素と酸素の原子が〈個〉になってつくる系である。

水素、酸素の原子は、それぞれ原子核（陽子と中性子）と電子が〈個〉になってつくる系である。

一般に、人の立てる「存在」は、「系一個」構造になる。

本論考はこれを命題として立てる：

#### 存在は、「系一個」構造



### 1.1.2 個の自由性：多様，そして独自に運動

「系一個」存在論で謂う「個」は，つぎの様態のものである：

- A. 多様
- B. 独自運動体

個は，その都度，自分の最適位相を実現しようとする。

「系一個」存在論は，このことを個の「自由性」と読む。

### 1.1.3 系は，衝突する個の自由の逐次均衡相

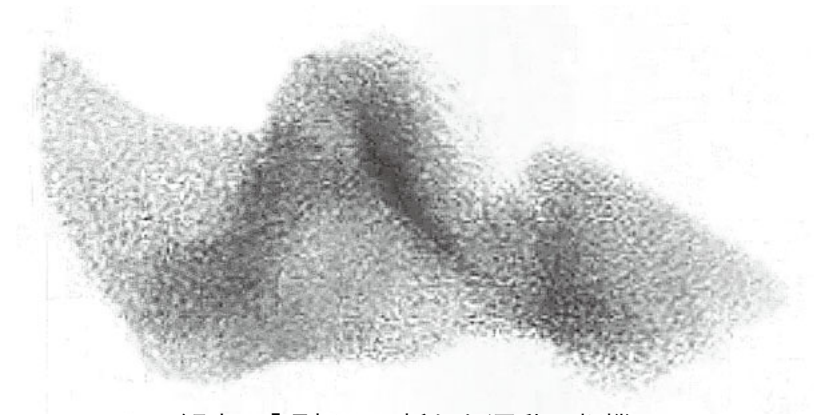
個の自由は，互いに衝突する。

系は，衝突する個の自由の逐次均衡相である。

さらに，均衡の実現は，自分の最適な位相を実現しようとする個の新たな運動の契機に過ぎない。

こうして，系は「ウロボロス」的に自己更新してやまない。

系の「ウロボロス」のイメージとして，本論考は「ムクドリ」の集団飛行」を用いる：



( 観点：「現相は，新たな運動の契機」)

こうして，系における個のあり方は，「生きていて，かつ生かされている」「自由で，かつ定まっている」である。

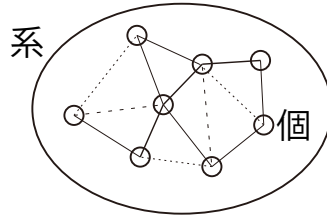


### 1.1.4 系は個の延長ではない（「マイクロ・マクロ問題」）

雲は、個である水の粒の関係性である。

水の粒は、個である水の分子の関係性である。

系は、個の関係性である。



個の関係性である系は、個の延長ではない。

数学の言い回しを用いれば、個と系の関係は「非線形」である。

「系は個の延長ではない」のイメージとして、本論考は「ムクドリ  
の集団飛行」を用いる：



（観点：集団の雲のダイナミクスは、個の延長ではない）

「系は個の延長ではない」は、「マイクロ・マクロ問題」<sup>(註)</sup>と呼ばれる主題の内容になる。

系に対して個は「マイクロ」であり、個に対して系はマクロである。

存在が「系一個」構造であるとは、存在が「マクロ・マイクロ」二重性だということである。

そして、系は個の延長でないとは、マクロはマイクロの延長ではないということである。

註：「マイクロ・マクロ問題」とは、「マイクロとマクロのつながりをどう考えればよいか？」の問題である。

この問題は、各種分野で立つ。

## 1.2 存在は、非実体

### 1.2.0 要旨

#### 1.2.1 存在は、「系一個」連鎖

#### 1.2.2 「系一個」連鎖の上限・下限

#### 1.2.3 存在は、非実体

#### 1.2.4 存在論と「自然」

### 1.2.0 要旨

本論考は、つぎの命題を立てる：

#### **存在は、「系一個」構造**

この命題は、

#### **存在は、「系一個」連鎖**

を、含意として導く。

実際、存在を「系一個」として立て、つぎにこのときの個を存在として立てるとき、「存在は「系一個」構造」から、その個は系になる。

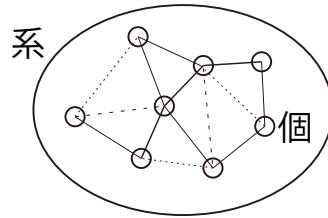
「系一個」連鎖ということになった存在は、非実体である。

実際、系は個の集合のつくる「形」であり、実体は個に求めることになる。しかし、個は、つぎにこれを存在として立てる段で、系になる。

### 1.2.1 存在は、「系一個」連鎖

本論考は、つぎの命題を立てる：

**存在は、「系一個」構造**

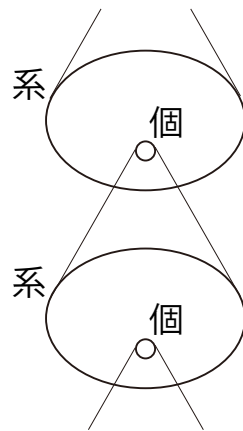


この命題は、

**存在は、「系一個」連鎖**

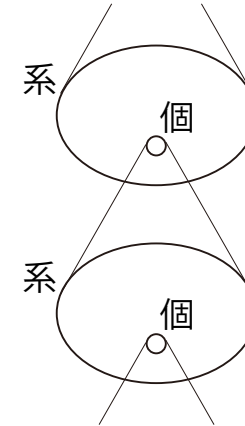
を、含意として導く。

実際、存在を「系一個」として立て、つぎにこのときの個を存在として立てるとき、「存在は「系一個」構造」から、その個は系になる。



### 1.2.2 「系一個」連鎖の上限・下限

「系一個」存在論は、人の立てる「存在」を「系一個」階層構造に見る存在論である。



このとき、「系一個」連鎖は、上方・下方無際限ではあり得ない。

上限・下限が自ずと現れる。

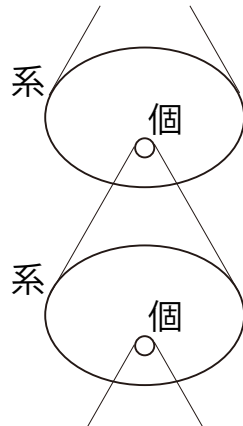
またそれは、単に「系一個」連鎖がちゃん切れるというふうではなく、「系一個」の様相がひどく変わったものになるというふうである。

実際、物理学の営為になる「系一個」存在論では、下限は「量子論」、上限は「宇宙論」となり、そしてそこでの「系一個」は、本論考がここまで用いてきた「系一個」の常識的な図式に収まらないものになる。

### 1.2.3 存在は、非実体

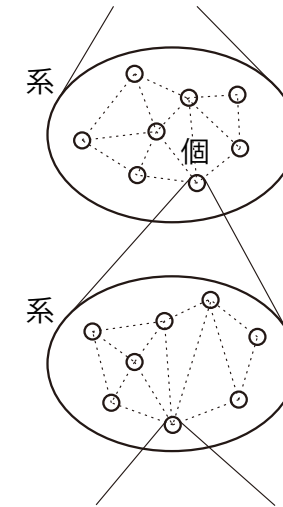
存在は、「系一個」連鎖である。  
特に、存在は非実体である。

実際、系は個の集合のつくる「形」であり、実体は個に求めることになる。  
しかし、個は、つぎにこれを存在として立てる段で、系になる。  
「実体」はこのように先送りされていくことになり、結局うやむやなふうで消えてしまう。



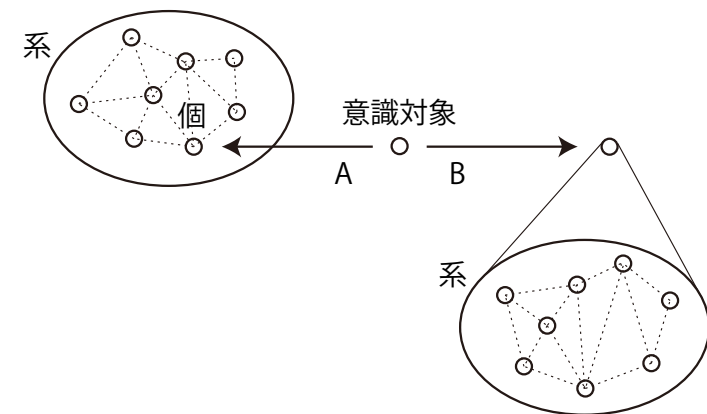
### 1.2.4 存在論と「自然」

「系一個」存在論では、存在が「系一個」連鎖になる：



そこで、存在の定立は、つぎの2通りになる：

- A. 意識対象が<個>として位置づく<系>を想う
- B. 意識対象を<系>として想う



## 1. 「系一個」存在論

一般に、存在論は、「存在を想う」を行う。

「存在」のことばの指すものを求めることは、どこまでいっても「存在を想う」である。

「存在を想う」は、「存在を任意勝手に想う」にはならない。

「存在を想う」を自ずと規制しているものがある。

「任意勝手」に自ずと限度を課しているものがある。

「存在」のことばを強いて用いるとすれば、これに対してである。

これは、いろいろに呼ばれてきた。

「自然」とか「物理」とか「物自体」とか。

キリスト教文化だと、「神」になったりする。

人が立てる「存在」と「自然」の関係は？

「常識」は、この間に<写像>を立てる。

「系一個」存在論は、非実体の存在論である。

「存在」のことばが指すものは非実体であり、この意味で、「存在」のことばが指すものは、無い。

非実体の存在論は、「存在」と「自然」の関係については、せいぜいつぎのように述べるにとどまる：

「人の立てる「存在」は、「自然」の表現である」

(要点：「表現」は、「そのもの」ではない)

## 2. 「系一個」存在論に類縁の存在論

### 2.0 要旨

### 2.1 「個・系」の存在論

### 2.2 「非実体」の存在論

## 2.0 要旨

「系一個」存在論は、つぎの3点を「存在」の要点にする：

1. 存在は、「系一個」構造（「系一個」連鎖）
2. 系は個の延長ではない
3. 存在は、非実体

この「系一個」存在論には、3点の比重・内容に違いをおきつつ、類縁の存在論がある。

ここでは、1の「個・系」に関する類縁の存在論として、つぎのものを取り上げる：

- ・「コナトウス」（スピノザ）
- ・「オートポイエーシス」
- ・「リゾーム」（ドゥルーズ＝ガタリ）
- ・「複雑系」（複雑系科学）
- ・「無用の用」

また、「非実体」が強調されている存在論として、つぎのものを取り上げる：

- ・「空（くう）」
- ・量子論

## 2.1 「個・系」の存在論

### 2.1.0 要旨

#### 2.1.1 「コナトウス」（スピノザ）

#### 2.1.2 「オートポイエーシス」

#### 2.1.3 「リゾーム」（ドゥルーズ＝ガタリ）

#### 2.1.4 「複雑系」（複雑系科学）

#### 2.1.5 「無用の用」

## 2.1.0 要旨

「系一個」存在論には、類縁の存在論がある。ここでは、特に「個・系」が強調されているものを取り上げる。

スピノザの「コナトゥス」は、「個・系」の存在論として読める。即ち、「相互作用する個」の「作用(努力)」が、「コナトゥス」である。

「オートポイエーシス」は、つぎの存在論である。  
 <系>の現前は、<個>の「自分の位相を<自分以外>に対して調整する」がその都度定める。  
 個それぞれがこの調整を行うことの結果は、「自分の位相を<自分以外>に対して調整する」が再び必要になる」である。  
 <系>のスケールでこの模様を観れば、「<系>は、その都度自分自身に反応し (self\_referential), 自分を変える」に見える。  
 これは、自分を飲み込み続けるウロボロスの絵図である。

複雑系科学は、「個の相互作用の現象」を、実際に科学するものである。

「無用の用」も、「有るものは、見えないものを伴っている」の意味では、「個・系」の存在論のタイプと見なせる。

## 2.1.1 「コナトゥス」(スピノザ)

いま、ムクドリของกลุ่ม飛行を考える：



<個>の振る舞いは、「自己保存への努力 (conatus sese conservandi)」である。

そしてこれが全体として、集團飛行という系を現す。

スピノザの「コナトゥス」は、つぎの存在論である：

定理4 いかなる物も、外部の原因によってでなくては滅ぼされることができない。

定理5 物は一が他を滅ぼしうる限りにおいて相反する本性を有する。言い換えればそうした物は同じ主体の中に在ることができない。

定理6 おおのこの物は自己の及ぶかぎり自己の有に固執するように努める。



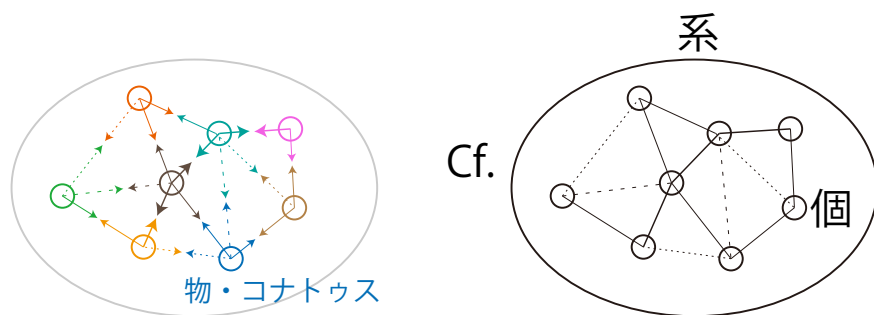
定理7 おのこの物が自己の有に固執しようと努める努力 (conatus) はその物の現実的本質にほかならない。

定理8 おのこの物が自己の有に固執しようと努める努力 (conatus) は、限定された時間ではなく無限定な時間を含んでいる。

(『エチカ』第3部)

「コナトゥス」の論に、〈個〉に対するところの〈系〉は、出て来ない。しかし、「コナトゥス」の存在論は、反照的に、「〈個=コナトゥス〉の〈系〉」を観じていることになる。

よってここに、「系一個」存在論に類縁の存在論として取り上げるものになるわけである。



ちなみに、「コナトゥス」の存在論における〈個〉の有り様は、「決められていて、かつ自由」である。

スピノザの「倫理学」は、これを基調と定めて読むものになる。

## 2.1.2 「オートポイエーシス」

〈系〉の現前は、〈個〉の営みとその都度定める。

「〈個〉の営み」は、「自分の位相を〈自分以外〉に対して調整する」である。

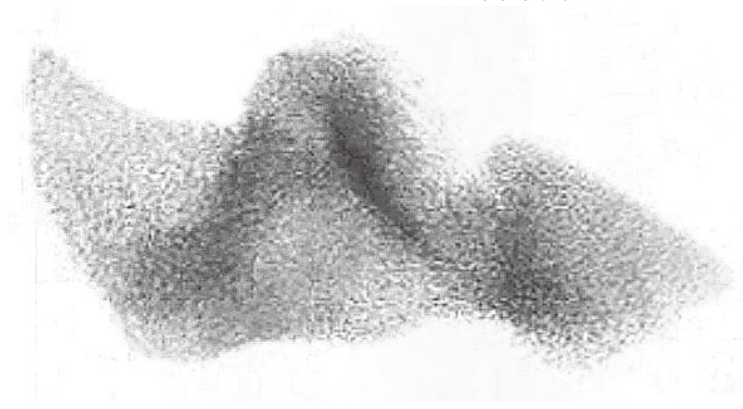
個それぞれが、この調整を行う。

その結果は、「自分の位相を〈自分以外〉に対して調整する」が再び必要になる」である。

〈系〉のスケールでこの模様を観れば、「〈系〉は、その都度自分自身に反応し、自分を変える」に見える。

これは、自分を瞬間瞬間飲み込むウロボロスの絵図である。

イメージ：ムクドリ集団飛行



系に対するこのような見方に、「オートポイエーシス」がある。

「オートポイエーシス」は、系のウロボロス構造を、「self-referential」「自己維持」「自己組織化」「自己画定」等のことばを用いて説明する。

「オートポイエーシス」は、「系一個」の存在論を行うものである。

「オートポイエーシス」のシステム論は、ウンベルト・マトゥラーナ (Maturana) とフランシスコ・バレラ (Varela) の生命システム論が出自である。

この考えは、ニクラス・ルーマン (Luhmann) の社会システムへの応用によって、分野横断的に広く知られるところとなる。

オートポイエーシスのシステムは、およそつぎのように特徴づけられる：

1. 円環的な構造 (自己回帰的 self-referential)
2. 自己による境界決定 (自己画定的)

これは、「現前の回収が、即ち現前」ということであり、「ウロボロス」がこれのイメージになる。

「自己回帰的」「自己画定的」からは、それぞれつぎのことが導かれる：

- 「自己維持のみがその機能」
- 「入力と出力を持たない」

こうして、オートポイエーシスのシステムは、「是非 / 進歩」と無縁である。

なお、細かいことをいうと、マトゥラーナ&バレラは「オートポイエーシス」を生命システムの必要十分条件にする。よって、この概念を生態系や社会システムに転用するのは、本来、マトゥラーナ&バレラの退けるところとなる。

以下に、マトゥラーナ&バレラのことばを引く：

Maturana, H.R. & Varela, F.J. 1972.

"Autopoiesis: the organization of the living"

In 河本英夫訳 (1991) 『オートポイエーシス — 生命システムとは何か』, 国文社.

- (i) オートポイエティック・マシンは自律的である。  
それがどのように形態を変えようとも、オートポイエティック・マシンはあるゆる変化をその有機構成の維持へと統御する。……
- (ii) オートポイエティック・マシンは個性をもつ。  
すなわち絶えず産出を行い有機構成を普遍に保つことによって、観察者との相互作用とは無関係に、オートポイエティック・マシンは同一性を保持する。……
- (iii) オートポイエティック・マシンは、特定のオートポイエティックな有機構成をもっているもので、そしてまさにそのことによって、単位体を成している。  
オートポイエティック・マシンの作動が、自己産出のプロセスのなかでみずからの境界を決定する。
- (iv) オートポイエティック・マシンには入力も出力もない。  
オートポイエティック・マシンとは無関係な出来事によって攪乱が生じることがあるが、このような攪乱を補う構造変化が内的に働く。……これらの変化は、オートポイエティック・マシンを規定する条件である有機構成の維持につねに従属している。……

(pp.73 - 75)

### 2.1.3 「リゾーム」(ドゥルーズ=ガタリ)

ドゥルーズ=ガタリによる「リゾーム」も、「系-個」存在論の一類型になる。

『リゾーム……序』は、作者の独特な企図/思い込みからナンセンスの冗長な多弁が文体になっているが、述べられていることは「自己言及的生成システム」の考えである。

ざっくり、「オートポイエーシス」と一緒にしてよい。

「リゾーム rhizome (地下茎)」は、「racine (根)」の対立概念として立てられる。

このときの「根」の意味は、トリー(木)構造である。

対して、「地下茎」の意味は、ネットワーク構造である。

「リゾーム」は、動的に変化するネットワークを絵図にする。

その動的変化のダイナミクスは、「自己言及的生成」である。

ネットワークのノードは、<その都度自身の位置取りを調整>を運動する。

<その都度自身の位置取りを調整>は、ノード個々においては単純な運動だが、これの総合になるネットワークは、複雑な運動体(「複雑系」)になる。

「複雑」の相は、「リゾーム」では "multiplicité" と表現される。

「ダイナミクス/メカニズム」の相は, "machine" (機械) と表現される。

<その都度自身の位置取りを調整>は, "agencement" (「組み込み」) の表現になる。

そして、トリー構造の構成的システムに対立させる自己言及的生成システムは、「器官で構成される身体」に対立する "corps sans organes" (「器官なき身体」) である。

C'est une **multiplicité**

- mais on ne sait pas encore ce que le multiple implique quand il cesse d'être attribué,  
c'est-à-dire quand il est élevé à l'état de substantif.

Un **agencement machinique** est tourné

vers

les strates qui en font sans doute  
une sorte d'organisme,  
ou bien une totalité signifiante,  
ou bien une détermination attribuable à un sujet,

mais non moins vers

un **corps sans organes**

qui ne cesse  
de défaire l'organisme,  
de faire passer et circuler des particules  
asignifiantes, intensités pures,  
et de s'attribuer les sujets auxquels il ne laisse  
plus qu'un nom comme trace d'une intensité.

(Mill Plteaux, p.10)

さらに、「器官なき身体」は他の「器官なき身体」とネットワークを成して、高次の「器官なき身体」を構成する。(「系-個」存在論!)

Un livre n'a donc pas davantage d'objet.

En tant qu 'agencement, il est seulement lui-même  
en connexion avec d 'autres agencements,  
par rapport à d'autres corps sans organes .  
(*Mill Plteaux*, p.10)

<その都度自身の位置取りを調整>の "agencement" は、これを「動因」  
の相ととらえれば、"desire" (「欲望」) の表現になる。

*l'Anti-Œdipe* の "machines desirantes" (「欲望する機械」) は、「自己  
言及的生成システム」である。

(Deleuze + Guattari, 1972 : *l'Anti-Œdipe*)

ドゥルーズによる "virtuel" (「潜勢的」) の概念も、「自己言及的生成シ  
ステム」に含ませるとしよう： "virtuel" の主題化は、自己言及的生成  
のダイナミクスの主題化に包摂される。

Tout actuel s' entoure de cercles de virtualités toujours  
renouvelés, dont chacun en émet un autre, et tous  
entourent et réagissent sur l' actuel

(Deleuze, 1995 : *L' actuel et le virtuel*)

## 文献

- ・ Deleuze, G. + Guattari, F. , 1972 : *L'Anti-Œdipe: Capitalisme et schizophrénie 1*, Paris, Éditions de Minuit.  
(『アンチ・オイディプス』, 宇野邦一訳, 河出文庫上下, 2006)

- ・ Deleuze, G. + Guattari, F. , 1976 : *Rhizome*, extrait de *Mille Plateaux*  
(『リゾーム……序』, 豊崎光一 編訳, 「エピステーメー」 臨時増  
刊号, 1977, 朝日出版社)
- ・ Deleuze, G. + Guattari, F. , 1980 : *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2*, Paris, Éditions de Minuit.  
(『千のプラトー ——資本主義と分裂症』, 宇野邦一他訳, 河出書  
房新社, 1994 / 河出文庫上中下, 2010.9-11) | m
- ・ Deleuze, G. , 1995 : *L' actuel et le virtuel*, In *Dialogues*,  
1996, Flammarion.

### 2.1.4 「複雑系」(複雑系科学)

「系一個」を構造とする存在は、「オートポイエーシス」であり、そして複雑系科学の謂う「複雑系」である。

「オートポイエーシス」は、「系一個」存在への理念的アプローチということになり、構造的な捉えを示す。

そして、複雑系科学は、「系一個」存在への実証的アプローチということになる。

複雑系科学は、〈個〉における何が〈系〉全体の挙動を現すことになるのかを、明らかにしようとする。

スピノザでいうと「コナトゥス」、**「オートポイエーシス」**でいうと「self-referential」、そして後に出てくる「空(くう)」でいうと「縁起」なるものを、科学に乗せようとする。

方法は、「数理モデル」と「シミュレーション」である。

ただし、複雑系科学は、容易に想像されるように、人のリアルな系(「生態系」)に近づくには、ひどく遅々たる歩みである。

実際、一見単純に思える事象も、数理モデル化はひじょうなチャレンジになる。

テーマをチャレンジできそうなテーマを限定することは、人のリアルな系を遙か遠くに置くことである。

しかしこのことは、「複雑系科学は使えるものではない」を意味しない。複雑系科学が示してくるものは、有益なヒント、メタファとして用いることができる。

### 2.1.5 「無用の用」

存在を立てるとき、それを系としてつくっている〈個〉は見えないものになる。

この見えないものを、見えないからといって〈無いもの〉にすれば、存在自体が無くなる。

見えるものは、見えないものがつくっている。

「無用の用」の箴言がある。

これには、二通りの意味がたつ：

- A. ネガの用：「有るものは、それをポジとするネガがあることで、有る」
- B. 見えないものの用：「有るものは、見えないものがつくっている」

そして後者は、「系一個」存在論のタイプと見なせる。

## 2.2 「非実体」の存在論

### 2.2.0 要旨

#### 2.2.1 「空(くう)」

#### 2.2.2 「粒は波」(量子論)

### 2.2.0 要旨

「系一個」存在論には、類縁の存在論がある。ここでは、特に「非実体」が強調されているものを取り上げる。

最も古いものでは、仏教の存在論である「空観(くうがん)」が挙げられる。「一切皆空」の「空」は、存在の「系一個」構造における系の「空」性を捉えたものと解釈される。実際、空観では、存在(「色」)は「縁起」が現すものであり、そして「縁起」は、「系を現すところの個の相互作用」に他ならない。

「系一個」の存在は、「雲一粒」に喩えられる。

「雲一粒」をダイナミクスのことばで表現すれば、「波一粒」になる。

そして「個は系」には、「粒は波」が応じる。

「粒は波」は、科学にある。——量子論である。

## 2.2.1 「空(くう)」

空に雲がある。

その雲を捉えてみようとして、雲に近づいていく。

すると、雲は無くなってしまふ。

雲という実体があるわけではなかった。

では、どうして雲があるのか？

雲の中は霧である。

水の粒が雲をつくっている。

そうか、水の粒が実体として有るものか！

そこで、水の粒を捉えてみようとして、これの分析に入っていく。

すると、今度は水の粒が、さきほどの雲の役どころにつく。

水の粒は見えなくなってしまう。

代わって、新たな実体を見出していくことになる。

このプロセスは、延々と続くように思える。

自然的存在に限らず、人にとっての物事の存在性はこのようなのである。

ということは、「実体として有るものは無い」ということか？

しかし、「一切皆無」と言うと、またおかしいことになる。

雲や水の粒が現れていることの説明がつかない。

そこで、存在論は、「有るでもなく無いでもなく」の存在論でなければならぬ。

「有るでもなく無いでもなく」を、「空(くう)」と称する。

この存在論が、「空観(くうがん)」である。

「空観」は、「一切皆空」の存在論である。

「有るでもなく無いでもなく」の存在論は、これの機序を説く。

機序は、「縁起」である。

再び、雲を例にする。

雲は、水の粒の「相依(そうえ)」で成っている。

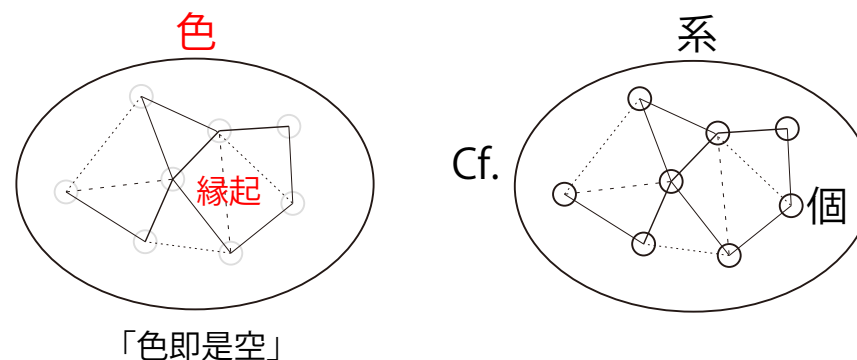
雲を捉えようとしたら、水の粒の「相依」を見出すばかりである。

水の粒の「相依」が雲を現し、雲の形をつくっている。

この「相依していること」を、「縁起」を称する。

ものごとは、「縁起」で成る。

そしてこのときのものごとの存り様は、「有るでもなく無いでもなく」である。



## 2.2.2 「粒は波」(量子論)

「系一個」存在論は、つぎを内容とする存在論である：

存在は、個の系

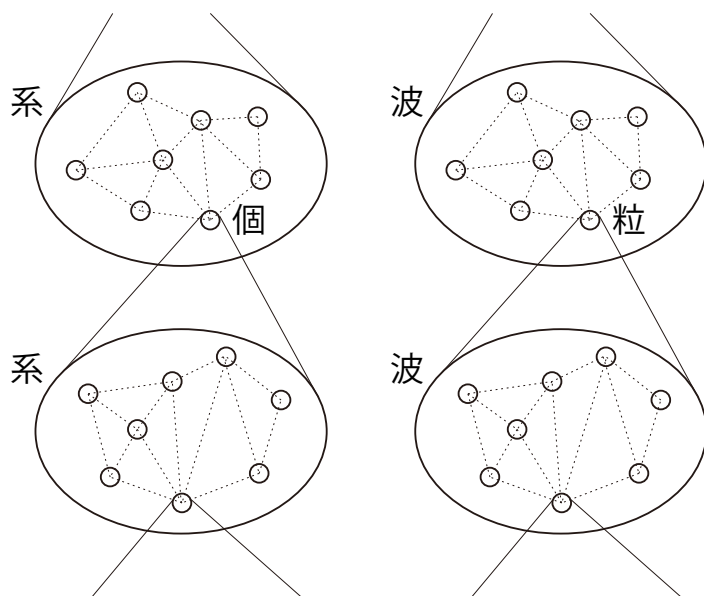
個は、系

したがって特に、存在は「系-個」連鎖——この意味で、「非実体」

「系一個」のイメージは、「雲-粒」である。

これをダイナミクスで表現すれば、「波-粒」になる。

そしてこのとき、「個は系」には「粒は波」が応じる。



「粒は波」？

「粒は波」は、科学にある。

量子論である。

量子論の謂う「粒は波」の「波」は、簡単に言うと、確率事象である。ただしこの場合、「○○の確率は5%、△△の確率は12%、……」と言ったときの「○○の確率は5%」「△△の確率は12%」……は、個々に実体とされる。

こうして、粒は、実体「○○の確率は5%」「△△の確率は12%」……の重なり合いである。

——この解釈が、量子論の真骨頂である(註)。

註：この解釈は、物理学での「ミクロの粒子」の振る舞いを説明するために案出された。

この解釈は「説明を与えることができる」を以て受容されるのであり、真偽を問題にするものではない。

さて、ここで最初の粒を「個」と読み、実体「○○の確率は5%」「△△の確率は12%」……の重なり合いを下位の「個」の関係性と読めば、「個は系」になる。

併せて、人間の立てる「存在」としては、ここを「系-個」連鎖の下限と見ることになる。



### 3. 言語レベル

#### 3.0 要旨

3.1 存在の記述は, 「マクロ・ミクロ」二重性

3.2 ミクロの記述は, マクロにつながらない

3.3 実体論 / 表象主義の受容

## 3.0 要旨

存在は「系一個」の構造をとる。

系に対して個は「ミクロ」であり、個に対して系はマクロである。

存在が「系一個」の構造をとるとは、存在が「マクロ・ミクロ」二重性だということである。

一般に存在論は、「その存在論に対応する言語論」という形で、言語論を定める。

存在の「マクロ・ミクロ」二重性に対応して、存在の記述は「マクロ・ミクロ」二重性になる。

「系一個」存在論の定める言語論は、「マクロ記述・ミクロ記述」の言語レベルの違いを立てるものである。

ミクロ記述は、意図的（確信犯的）に実体論を行う。

マクロ記述は、現象論——形（かたち）論——を行う。

ミクロは、マクロに延長しない。

特に、ミクロの記述は、マクロにつながらない。

「延長」でないのは、複雑系科学の言い方を用いれば、「創発」が入ってくるからである。

「創発」は、記述できない（捉えられない）。

## 3.1 存在の記述は、「マクロ・ミクロ」二重性

存在は「系一個」の構造をとる。

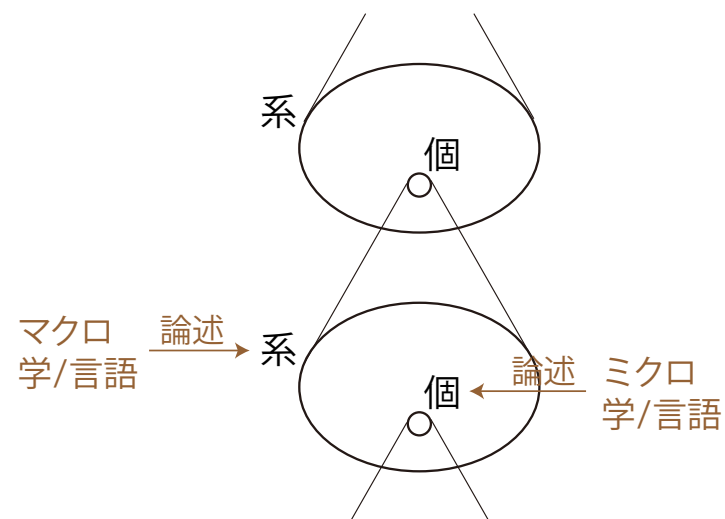
存在は、「マクロ・ミクロ」二重性である。

特に、存在の記述は、「マクロ・ミクロ」二重性になる。

このとき、マクロ記述とミクロ記述は、言語レベルの違いを立てる。

即ち、ミクロ記述は、意図的に実体論を行う。

マクロ記述は、現象論——形（かたち）論——を行う。



例えば、雲の記述が「雲——水の粒が<個>になってつくる系」の枠組による記述であるとき、「雲」は実体ではない。実体は、水の粒である。「雲」の記述は、「モクモク」とか「刷毛でサーッと引いた」のようなことばが用いられる。この表現に「稚拙」「科学的でない」のようなクレー

### 3. 言語レベル

ムがつくことはない。

一方、水の粒の実体的記述には、「科学的」が求められる。

こうなるのは、それぞれの記述に言語レベルの違いを措定しているからである。

### 3.2 ミクロの記述は、マクロにつながらない

ミクロは、マクロに延長しない。

特に、ミクロの記述は、マクロにつながらない。

常識は「ミクロの延長がマクロ」「ミクロの総和がマクロ」だが、これは、数学の言い方を用いれば、「線型」の世界観ということになる。

ミクロとマクロの関係は、「非線形」である。

「延長」でないのは、複雑系科学の言い方を用いれば、「創発」が入ってくるからである。

「創発」は、記述できない(捉えられない)。

### 3.3 実体論 / 表象主義の受容

「空(くう)」と「オートポイエーシス」の違いを見るとしよう。

存在論としては同じである。

違いは、スタンスである。

「オートポイエーシス」を語るスタンスは、「科学者」である。

「オートポイエーシス」の論は、科学の方法である「対象の構造化」に向かうことになる。

これに対し、「空」を語るスタンスは、「尊士」である。

「空」(「有るでもなく無いでもなく」)の存在論を、「……ではない」の表現を連ねる形で示す。

「……である」を言うことはしない。——「……である」を言うことは「対象の構造化」に論を進めることであるが、これをしないというわけである。

このことを、「分別智」と「無分別智」(「無記」「不立文字」)の別に対し自分は「無分別智」である、と説明する。——「対象の構造化」は「分別智」であり、もとよりすることではない、というわけである。

「尊士」は、「無謬の者」である。

「……である」を言うことは、間違いを言うことである。

「……でない」を言うこと、そして言わないことが、間違いを言わないことである。

そこで、「……でない」を言うこと、そして言わないこと(「無分別智」)が、「尊士」の方法になる。

ナーガールジュナの『中論』の文体は、典型的にこれである。

『中論』は、ウィトゲンシュタインの『哲学探求』を想起させる。

『哲学探求』は、趣旨が実体論批判であり、『中論』と同じである。

そしてその語り口が、『中論』とよく似ている。

さらに、「語り得ぬものについては、沈黙しなければならない」(『論理哲学論考』)を「言語ゲーム」のこぼに乗せる格好で、やはり「無分別」を以て論を閉じる。

「尊士」の方法は、探求・発見を自ら閉じるものである。

己は小さく、世界は広い。

「尊士」を役回りにしていない者——間違いをやってナンボの者——は、「分別」をとる。

「分別」を構えとして、「である」の命題をつくる。

存在の論述は、「マクロ・ミクロ」二重性になる。

このとき、マクロ記述とミクロ記述は、言語レベルの違いを立てる。

即ち、ミクロ記述は、意図的に(確信犯的に)実体論を行う。

マクロ記述は、現象論——形(かたち)論——を行う。

「マクロ・ミクロ」は、「水の粒子(ミクロ)の相互作用の現象である雲(マクロ)」の対象把握法である。

複雑系科学は、「マクロ(系)・ミクロ(個)」の枠で「個の相互作用」を科学していることになる。

ただし、複雑系科学は、人のリアルな系に近づくには、ひどく遅々たる歩みである。「オートポイエーシス」は、先回りして、「個が相互作用

### 3. 言語レベル

する系」の理念形を示しているものと見なせる。

これらの「分別」は、「空」（「有るでもなく無いでもなく」）の存在論から外れるものではない。

マクロに対しミクロを実体的に立てることになるが、その実体性は「仮設」である。

実際、《ミクロはつぎには「マクロ・ミクロ」のマクロに替わる》を承知しているわけである。

そして「仮設」の方法論は、『中論』の「中」の意味であるところの「中道」の要素である。

ちなみに、わたしは実体論批判・合理主義批判・表象主義批判をつくるタイプの者であるが、「マクロ・ミクロ」を方法にするとき、この批判は無用のものになる。「ミクロ」において、「仮設」ということで、意図的（確信犯的）に実体論・合理主義・表象主義をやることになるからである。

## おわりに

「系一個」存在論は、わたしの存在論の到達点である。  
この存在論にまとまったことを、自分では満足している。

到達してみればどうということのない、単純な存在論なのだが、「どう  
ということのない、単純な」は、定めし「いい線をいってる」というこ  
とである。

どうしてこう思うかという、数学や物理学がこうだからである。

即ち、数学や物理学では、ゴチャゴチャしているのは、まだできていな  
い状態である。

できあがった形は、構成主義で組み立てられた現代数学が示すように、  
シンプルである。

このシンプルに至るのに、人類はゴチャゴチャの期間を必要とした。

シンプルがいちばん最初に捉えられそうだが、そうではない。

シンプルはいつもゴールの趣きで得られる。

## 参考文献

Luhmann, N. 1990

土方透・大澤善信訳 (1996) 『自己言及性について』, 国文社.

Maturana, H.R. & Varela, F.J. 1972.

"Autopoiesis: the organization of the living" In Autopoiesis and Cognition. D.Reidel Publishing Company, 1980.

河本英夫訳 (1991) 『オートポイエーシス — 生命システムとは何か』, 国文社.

中村元. 1980

『龍樹』, 講談社学術文庫, 2002.

Deleuze, G. + Guattari, F. , 1980

Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2, Paris, Éditions de Minuit.

宇野邦一他訳 (1994) 『千のプラトー — 資本主義と分裂症』, 河出書房新社.

Spinoza, B. 1667.

畠中尚志訳 (1951), 『エチカ—倫理学』 岩波文庫.

Wittgenstein, L., 1958.

Philosophical investigations [Philosophische Untersuchungen]. ( Tr. by G.E.M.Anscombe.) Basil Blackwell.

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て、現在、北海道教育大学教育学部教授。数学教育が専門。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される（この進行に応じて本書を適宜更新する）：

<http://m-ac.jp/thought/ontology/system/>

## 「系一個」存在論

---

2014-10-14 初版アップロード (サーバー：m-ac.jp)

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

---

<http://m-ac.jp/>  
m@m-ac.jp

---



